



Title	心理動詞と動作動詞の類比的研究：時間的性質を中心に
Author(s)	吉永, 尚
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49483
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	よしなが たどころ なお 吉永（田所） 尚
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 2 5 3 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	心理動詞と動作動詞の類比的研究－時間的性質を中心に－
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 三原 健一 （副査） 教 授 仁田 義雄 教 授 小矢野哲夫 教 授 杉村 博文 准教授 堀川 智也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、心理動詞と動作動詞の文法的性質の異同を明らかにし、またその異同は何に起因するかについて考察することを目的としている。

動詞の性質が文法現象に反映されるものに動詞連用形接続がある。用法の違いによって主語の意味役割や選択される動詞にも分類的な相違が見られ、これらには一定の法則がある。本研究で

は言語共通であることがわかったが、心理表現での人称制限は日本語固有の統語的制約であり中国語では観察されない。この問題には表現差と共に事象認知に関わる相違があると思われ、独語の人称観察などにより事象認知の相違について考察した結果、日本語には視点固定的な認知傾向が見られることがわかり、これが人称制限などの文法現象に関わっていることが推測された。

結論として、**Experiencer**（経験者）の視点の優位性に関わる文法現象は心理動詞の時間的性質とは関与せず心理世界の事象を表すという性質によるものであり、心理動詞の特殊性と見なされる人称制限も時間的性質とは関わりのないものであり、日本語の表現習慣、事象認知的な問題に関わるものであるということが分かった。

従って心理動詞と動作動詞は時間的性質において同質であり、文法現象における両者の相違は心理世界の事象と物理世界の事象という相違に由来し、また日本語特有の事象認知と関わっていると思われる。

本研究を通じて心理動詞と動作動詞のアスペクト的な同質性を提唱したいと思う。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、心理動詞と動作動詞の文法的性質の異同を明らかにし、また、その異同が何に起因するかについて考察することを目的としている。全8章のうち、第1章から第5章までが主として動詞連用形・テ形に関する分析であり、第6章から第8章までが心理動詞に関する分析となっている。後半章で心理動詞が特に取り上げられているのは、前半章の分析で抽出された原則から逸脱する特質が心理動詞において観察されるからである。

論文審査は、まず、申請者による論文全体のまとめを20分程行い、次いで、主査から30分弱質疑応答を行った後、各審査担当者からの質疑応答に移った。審査に要した時間は概ね120分程度であった。依拠する枠組みや方法論を含め、分析の多くが受け入れ難いとする担当者もあったが、これは、主として文法研究に対する立場の違いに起因するものかと思われる。全体的には、各担当者から出された質問に対して、概ね妥当な受け答えがなされたと言える。

日本語における連用形・テ形についてはこれまでも多くの研究がなされているが、本博士論文では、付帯用法・継起用法・因果用法・並列用法のそれぞれの用法に関して、用いることが出来る動詞と出来ない動詞を綿密に検証し、統語的テストを適用することにより動詞分類の中での位置付けを明確にした点が、まず高く評価される。また、心理動詞については、包括的な研究があまりなされてこなかった状況において、心理動詞の位置付けを明確化した点、及び、中国語のデータも援用しつつ、視点の観点からその文法的振る舞いを明らかにした点が高く評価される。方法論については、主として体系的な意味記述を指導原理とするものであるが、随所に現代言語学の成果が盛り込まれており、幾つかの箇所では樹形図を用いた構造的分析もなされている。また、本博士論文を基盤とした研究書が、和泉書院から既に刊行されていることも付記しておきたい。

もちろん、完璧な論文というものは極めて稀であるので、本博士論文についても分析が不十分であると思われる点が指摘された。大きな点に関する指摘は以下のようなものであった。まず、論文の構成として、前半と後半が分離している印象があるので、もっと有機的な繋がりを心がけるべきであるという指摘があった。また、理論言語学（特に生成文法理論）における統語的分析を批判している箇所が幾つかあり、生成文法を枠組みとする博士論文ではないことを考慮しても、涉猟すべき文献で抜け落ちているものがあることを含め、批判としては不十分であるという指摘もあった。さらに、本博士論文では「アスペクト」が重要な概念の一つであるが、本博士論文が依拠する以外の枠組みにおけるアスペクト研究の知見に対して、十分な敬意が払われているとは言えないという指摘もなされた。中国語の分析に関しても、総論は賛成だが、各論については賛成し難いものがあるとされた。また、中国語学の文献数が少ないことや、文法性判断に問題がある文例などが存在することも指摘された。

上で述べたように、分析が不十分であると思われる点もあるが、全体に亘って動詞分類を総体的に見据えた上で綿密な論証を行っており、博士論文として十分な評価に値すると考えられる。以上のことを総合し、論文審査担当者間で慎重な協議を行った結果、論文博士の学位に値する業績であると結論付けるに至った。